

日本語教育実習実施報告

大阪樟蔭女子大学 国際英語学科専任講師 杉本香

1. はじめに

大阪樟蔭女子大学では日本語教育課程が設置されており、所定の単位を修得すれば、日本語教員の資格が与えられる。日本語教育実習はその課程の集大成となるもので、それまでの学習で得た知識を実践に移す場となっている。前年度までは、留学生数の多い大学に受け入れを依頼していたが、実際に大学で教えるには修士以上の学位が必要となるため、本学学生のキャリア形成を考えると日本語学校で実習を行うのが適切だと考え、受け入れ先を新たに探すこととなった。本稿では、2015年度に実施した日本語教育実習の概要を報告し、その効果の報告と振り返りを行い、実習の意義を考え、次年度への課題を提示する。

2. 日本語教育実習の概要

実習先は本学から近い場所にある「シンアイ語学専門学院」である。日本語教育課程履修中の5名（4年生3名、3年生2名）が参加した。実習期間は2015年9月14日から18日の5日間で、4日間で初級および中級クラスの授業見学・学生との交流会・教壇実習準備に充てられ、最終日に1人1時間ずつ教壇実習を行った。大学で事前指導を1日行い、学生には授業見学レポート（授業内容と気づいた点を詳細に記述）と実習レポート（教壇実習録画ビデオ視聴後の反省を含めたもの）および学生同士の相互評価という三つの課題を与えた。実習後に1日設けて全員が集まり振り返りも行ったが、それに関しては次節で報告する。

3. 日本語教育実習の成果と振り返り

課題として与えたレポートには、実習生が得た様々な気づきと学びが記されていた。授業見学を通して、教員によって様々な教授方法があること、それぞれに工夫がなされていること、学習者の関心を引き付けることの大切さ、学習者一人一人のレベル把握の必要性、日本語だけでなく日本事情や歴史の

知識の必要性、授業準備の大切さ等、多くのことに気づいていた。筆者自身も経験しているが、授業見学が大きな学習の場であることは明白である。

また実習後の振り返りでは、日本語学校のイメージと実際、授業見学での気づき、学習者についての気づき、実習生としての態度や姿勢、実習準備について、大学の授業と実際授業準備とのギャップ、教壇実習での気づき、将来について、全8項目について聞き取りを行った。ここでは、今回の実習の多くの反省点を見つけることができた。最も大きな問題点は、実習生にとって時間がなく非常にハードだったということと、受け入れ先に大きな負担をかけたことである。日本語教育実習の現場においては、学習者は大抵アルバイトやボランティアで集められ、既習事項でも未習のふりをして参加することも多いが、今回の実習校では時間の制約等で実習生が通常授業で教えることになった。そのため、実習生の授業はある程度のレベルが求められる。しかし、教案作成はその実習校のやり方を知ってから行った方がいいと考えて事前には指導しなかったが、そのために実習生にとっては準備時間が足りず、実習校の指導教員の手を多く煩わせるという事態になった。また、教案の書き方や授業で使えるイラストのWebサイト、印刷の仕方など、実習生は具体的に知らないことが多く、それも担当の指導教員から教示を受けていた。結果として数人の学生は授業がうまくいかず、自信を失わせることにもなった。

この話し合いにより、学生は自身の経験を振り返り言葉にすることで内省を深め、同時に不満も発散させることができたのではないかと考える。筆者も多くのことを学び、今後の課題を見つけることができた。振り返りの機会は必要だということを改めて認識し、今後も続けていこうと思う。

4. 学生にとっての日本語教育実習の意義

今回の日本語教育実習に参加した学生の中には、卒業後すぐに日本語教員を目指す者もいるが、全員がそうであるとは限らない。では、その学生にとって日本語教育実習の意義とは何であろうか。振り返りの際の聞き取りにより、それは学生により様々であることがわかった。学生の1人は、大学に入ってから学習の目標を見失い、何かに打ち込むことから遠ざかっていた。その学生がこの1週間を通し、一つのことに集中して努力する大切さを感じ、人間として少しでも成長したように感じたと言っている。この実習が転機と

なり、その後の学習意欲につながり、次の目標が見えたようである。またある学生にとっては、日本語教員として自分がやっていけるかどうか試す機会になり、別の学生にとっては逆に自信を無くし自分を見つめ直すきっかけにもなったようである。いずれにせよ、学生にとってはこの1週間の経験が学生生活の中でも重要な局面になったと言えるだろう。

5. まとめと今後の課題

今回の日本語教育実習では、学生は多くのことを学び、一定の成果を得られたと考える。しかし、課題も多く残った。第3節で述べた最大の反省点は、時間の不足と受け入れ先の負担であったが、最初の4日間の見学と最終日の教壇実習を1～2週間程度空けることで解決できると思われる。その間に大学の担当教員が教案指導することができ、実習先の負担も軽減され、学生も余裕を持って準備をすることができる。また、今回痛感したのが、ゴールを見通したカリキュラム設計である。はじめにも書いたように、この教育実習は日本語教育課程のゴールである。このゴールを通過するのに必要なことを、課程の各科目において学習しておかなければならない。日本語教育課程にある「日本語教授法」「日本語教材論」「日本語教育学演習」という科目の中で、教案の書き方、初級での学習事項、教師の話し方、教材・教具の探し方・使い方等、現場に必要なことを具体的に教えられるよう、直ちにシラバスの見直しを行う予定である。さらに、本学には留学生がほとんどおらず、外国人日本語学習者と接する機会が非常に限られるため、学生に多くの機会を与えられるように学外にネットワークを広げることも今後の課題である。本学から一人でも多くの優秀な日本語教員を輩出できるよう尽力したい。

